

Title	マルクス主義と疎外論
Author	半田, 秀男
Citation	人文研究. 20 卷 3 号, p.210-228.
Issue Date	1968
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

マルクス主義と疎外論

半 田 秀 男

現代疎外論には一つの大きな特徴がある。現代における人間の非人間化の諸事態を、それが「疎外」概念の下に把握し説明しようとした時、常に事態の曖昧化、時には神秘化すらが起ったこと、そして、このことから一つの作業、つまり「疎外」概念自体を明確化しようとする作業（就中ヘーゲルやマルクスの労作のテキスト・クリティークに基くそれ）が展開され始め、時にはこの作業自体が本来の疎外論であるかの如き観を呈したことが、これである。

勿論疎外論は単なる文献批判・概念批判の学ではない。それは、現代における人間の非人間化の諸事態を自覚し、告発し、克服することをこそ本来の使命としたところの一つの現実的思想であり、積極的理論であった。従って、たとえ「疎外」概念そのものに曖昧なものが附纏い、神秘化的要素が孕まれていたとしても、それ故また、そのような概念を原理とした「疎外論」は、場合によっては「止揚」すらされねばならないとしても、そのことによって疎外論の本来の精神及び使命そのものは簡単に蒸発しうべきものではない。従って重要なことは、一方で、事態を曖昧化し神秘化する一切の概念の曖昧さを、厳密な概念批判・概念規定の作業によって斥けつつ、しかも、疎外論の本来の根本精神を忘れることなく、それを、正確・厳密な哲学・社会科学理論の全体の中にしかるべく位置づけ、それによって、一切の非人間化を正しく批判し告発することのできる、しかもそれを正しく克服する道をも示すことのできるヒューマニズム的でかつ厳密に科学的な理論を築きあげることである。

二

我々は先ず、本来の意味での「疎外論」、単なる概念批判の学ではなく、いわば一つの時代認識・時代批判の学とも言えるところの独自の思想及び理論としての「疎外論」、このようなものとしての疎外論の孕む問題性を考察しよう。

このような疎外論にも実に様々の立場と形態とがある。その代表的な一つをここに挙げるならば、Fritz Pappenheim, *The Alienation of Modern Man*, Monthly Review Press, New York 1959があるであろう。⁽¹⁾以下に述べることはこれらのすべてにそのまま妥当するとは限らない。ただ、一般的に言ってこれらのものがややもすれば陥っている重要な問題点を指摘したいのである。

このようなものとしての疎外論は、基本的に言って、カール・マルクスの『1844年の経済学・哲学手稿』K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844* を典拠にしていると言える。即ち、これらのものは、何らかの形でこの『手稿』に展開されている疎外概念と思想を援用しながら、己れの議論を展開しているのである。⁽²⁾

ところがこの『手稿』に展開されている疎外概念自体が非常に問題的なものであると言える。一口に言えば、それは“人間の非人間化”の諸状態を把える概念であるとも言えるかも知れないし、“人間の創造物が人間から独立し、人間にとって疎遠なものとなり、逆に人間を支配する”という事態を表現する概念であるとも言えるかも知れない。これはこれで大過なからう。しかし『手稿』の疎外概念はこのような抽象的・一般的な意味のものに留まるかと言えば、決してそうではない。もっともっと複雑で、内部において色々に規定されている概念なのである。しかし完全に、明確に規定されている概念かと言えば、そうでもない。『手稿』の疎外概念は、こうして第一に、人間の非人間化の様々の現象、事態、関係を包括的に、かつ根本から把える——少くとも把えようとする——概念、従って極めて多面的に規定されているし、されざるをえない概念であり、第二に、その多面的諸規定がまだ、それぞれ明確に完結し、相互にはっきりと連関づけられてはいない生成途上の概念であると言える。この意味でそれは、一義的には規定されえず、包括的であるということからも、未完成であるということからも、抽象性と一般性を免れていない——それ自体、抽象的・一般的なものに留まろうとしているのではないが——概念なのである。

以上のことを具体的に示すために、ここで暫く『手稿』の「疎外された労働」の項を分析してみよう。

次の一文は「疎外」という用語が最初に現われる一節である。⁽³⁾（これを引用〔A〕とする。以下引用文冒頭のローマ字は引用文を代表する記号とし、同時にその引用文において提起されている思想を代表する記号とする。）

〔A〕,, Wir haben also jetzt den wesentlichen Zusammenhang zwischen dem Privateigentum, der Habsucht, der Trennung von Arbeit, Kapital und Grundeigentum, von Austausch und Konkurrenz, von Wert und Entwertung der Menschen, von Monopol und Konkurrenz etc., dieser ganzen Entfremdung mit dem Geldsystem zu begreifen.“

「我々は、従って今や、私的所有や、所有欲や、労働と資本と土地所有との分離やの間の本質的連関、交換と競争とのそれ、価値と人間達の価値下落とのそれ、独占と競争とのそれ、等々、この疎外全体と貨幣体制との本質的連関、を理解しなくてはならない。」

ここでは、「私的所有」、「所有欲」、「労働と資本と土地所有の分離」、「交換と競争（との分離）」、「価値と人間達の価値下落（との分離）」、「独占と競争（との分離）」〔（ ）内は注③に引用した仏訳の見解に従う場合〕が、「疎外」として一括されている（diese Entfremdungen でなく、diese ganze Entfremdung と言われている）ことが知られるであろう。内容が多様であること、しかも社会関係、その運動、それらに制約された人間の性向、また人間の状態、等々を表わす、それ自体同じ平面に並べることはできない諸規定がそこにあることに注意したい。

次にマルクスは「一つの国民経済上の現在の事実から出発する」と言いながら、以下の諸事態、即ち

（a）「労働者は、彼がより多く生産すればする程、彼の生産が力と範囲を増せば増す程、それだけ一層貧しくなる。労働者はより多く商品を生産すればする程、彼はそれだけ一層安い一個の商品となる。事物世界の価値増大^{フェアヴェルトウング}に、人間世界の価値下落^{エントヴェルトウング}が直接比例して進む。労働は諸商品を生産するばかりではない、それは労働自身と労働者を商品として生産する、しかもそれが一般に諸商品を生産するのに比例して。⁽⁴⁾」

という事態を挙げ、そしてこう言う、

（b₁）「この事実が表現するのは次のことより以外の何物でもない、即ち、労働が生産するところの対象、労働の生産物が、労働に対してある疎遠な存在^{ヴェーゼン}として、生産者に依存しない力として立ち向かうということ。⁽⁵⁾」

ここでは、（a）（国民経済上の現在の事実）が（b₁）（で述べられている「労働

からのその生産物の疎外」を「表現している」„ausdrücken“ というのだから、
 (a) は (b₁) の表現形態＝現象形態であり、従って (b₁) は (a) の本質である
 と言えようか？ ところでこの (a) は [A] で「疎外」として一括された諸
 事実に照応するもの（その一部の説明）であり、従ってそれ自体「疎外」と呼
 ばれてよいであろう。本質としての労働生産物の疎外、そしてその表現形態とし
 ての国民経済上の疎外された諸事態。

その次にマルクスは (a) の事態の深刻さを指示する叙述、

(a') ^{フエアヴァイルクリッツヒウング エントヴァイルクリッツヒウング}「労働の実現が現実性剥奪として現われる甚だしきは、労働者が餓死す
 るくらい現実性を剥奪される程である。……」⁽⁶⁾

を続け、そしてこう言う、

(b'₁) 「すべてこれらの帰結 „Konsequenzen“ は」「労働者が彼の労働の生
 産物に対して、ある疎遠な対象に対してのように振舞う、という規定のうちに
 含まれている。」⁽⁷⁾

(a') は (a) に対応し、(b'₁) (で述べられている「労働生産物の疎外」と
 いう規定) は (b₁) (同様) に対応するが、ここでは、(a') は「帰結」であり、
 (b'₁) (同様)「のうちに含まれている」„In der Bestimmung, daß..., liegen“
 というのだから、(b'₁) は (a') の根本原因、根拠とも言えようか？

ところで、本質であり根拠である筈の (b₁)、(b'₁)、＝「労働生産物の疎外」
 「以下これを (b₁) で代表する」がそれ自体また詳しく考察され、分析されねば
 ならないものなのである。マルクスは「さて我々は、対象化、すなわち労働者の
 生産を、そしてその中で、疎外、即ち対象の喪失、彼の生産物の喪失を、より詳し
 く考察しよう」⁽⁸⁾と言って、次のように展開している。

(b₁) の系₁、「従って労働者が外界、感性的自然を彼の労働によってより多く
 我がものとすればする程、それだけ一層彼は生活手段を二重の方面に奪われる。
 第一に感性的外界が益々彼の労働に所属する一対象、彼の労働の一生活手段た
 ることをやめるという方面。第二にそれが益々直接的意味での生活手段、労働
 者の肉体的生存のための手段たることをやめるという方面に。」⁽⁹⁾

(b₁) の系₂、「従ってこの二重の方面に労働者は彼の対象の奴隷となる。即ち
 第一に彼は労働の対象を、つまり仕事^{アルバイト}を貰うということ、第二に彼は生存手
 段を貰うということ。だから第一に彼は労働者として、第二に彼は肉体的主体
 として存在しうるということ。この奴隷状態の頂点は、彼はわずかにただ労働
 者としてのみ肉体的主体として己れを保ち、わずかにただ肉体的主体として
 のみ労働者である、ということである。」⁽¹⁰⁾

これらの、仮りに (b₁) の系と呼んだところのものは、(b₁) の表現形態であり、帰結であるとされた (a) , (a') とどういう関係にあるのか? 同じ事柄に当たるのではないか? 兎に角これらは、ここでは (b₁) 自体の内容規定として展開されている。

問題は以上に留まらない。

これまで (a) , (a') , 従って [A] の本質、根拠とされてきた (b₁) は、実は真の本質、真の根拠——これを [B] で総括しよう——の一側面にすぎないことが、やがて指摘される。⁽¹¹⁾

以下叙述を簡単にしよう。[B] の他の側面とは何か?

(b₂) 「労働の活動そのものの中での疎外、外化」⁽¹²⁾

(b₃) 「人間からの類の疎外」⁽¹³⁾

(b₄) 「人間の人間からの疎外」⁽¹⁴⁾

以上であるが、ここで問題なのは、第一に、これらが単に並列的な関係にあるのではなく、独特の相互連関にあることである。

(b₁) は (b₂) の「要約」または「結果」とされている。⁽¹⁵⁾

(b₃) は「疎外された労働」が (b₁) , (b₂) の疎外をもたらす中で (Indem ...) もたらすものとされる。⁽¹⁶⁾ やはり「結果」と言ってよいのであろうか? ところでここで問題なのは、「疎外された労働」という概念が、(b₁) , (b₂) そのものと即自的に同一視されず、寧ろそれらをもたらすものとして、独自の主語として立てられていることである。この「疎外された労働」は勿論、独自の主体ではなく、寧ろ、(b₁) , (b₂) の総括概念であり、ただ表現上、それが、それに下属する概念 (b₁) , (b₂) を目的語として立てているように言い表わされているのであろうか。

(b₄) は、(b₁) , (b₂) , (b₃) の「一つの直接的帰結」と言われている。⁽¹⁷⁾

そうすると、(b₁) , (b₂) は「疎外された労働」として概括され(つまり [B] として纏められ) , あらゆる「疎外」の本質であり根本原因である(たとえその中で (b₁) は (b₂) の結果であっても) とされることもできようが、(b₃) , (b₄) は、それらの帰結または所産であるとすれば、寧ろ [A] の系列に属すべきものではないのか、ということも問題になる。実際に、(b₁) , (b₂) , … (b₄) がそれぞれまた詳しく内容規定をうける段になると、(b₁) , (b₂) の内容規定も含めて、益々 [A] 系列、(a) , (a') の事態と触れ合ってくるのである。

いずれにせよ、第二に言っておきたいことは、(b₁) , … (b₄) が、それ自体また詳しく内容規定を受けねばならないということである。

(b₂) の内容規定。マルクスは „Worin besteht nun die Entäusserung der Arbeit?“ と問いながらこれを考察する。この „in et. bestehen“ は、⁽¹⁸⁾ “或物のうちにその実質、本体がある” という意味で言われるのだから „Worin…?“ の答えは、 „die Entäusserung der Arbeit“ の内容規定になると言ってよからう。

第一「労働が労働者に外的であること」，「彼の本質に属していないこと」，第二「従って彼は彼の労働の中で自分を肯定せずに否定し，快く感じずに不幸と感じ，何ら自由な肉体的及び精神的エネルギーを発展させずに彼の肉体を苦行で衰弱させ，彼の精神を荒廃させる」，第三「労働者は労働の外で初めて自分の許にいますと感じ，労働の中では自分の外にいますと感じる」，第四「彼の労働は自由意志的ではなく，強制されており，強制労働である」，第五「彼の労働は一つの要求の満足ではなく，それはただその外にある諸要求を満足させるための一手段にすぎない」，…最後に「労働は彼自身のものでなく，ある他人のものである」，「それは彼に属していない」，「彼は労働の中で自分自身ではなく，ある他人に所属している…」。⁽¹⁹⁾

(b₃) の内容規定。第一「類的生活と個人的生活」とが「疎外さ」せられ，第二「抽象的状態における後者」が「同様に抽象的な疎外された形態における前者の目的」たらしめられること，等々。⁽²⁰⁾

(b₄) の内容規定。「もし人間が自分自身に対立しているなら，彼には他の人間が対立しているのである。人間の彼の労働に対する，彼の労働の生産物に対する，彼自身に対する関係について当てはまることは，人間の他の人間に対する，また他の人間の労働とその対象に対する関係についても当てはまる。」⁽²¹⁾

さて第三に注意しておきたいことは，本質の系列〔B〕におけるこれらのより進んだ諸規定は現象の系列〔A〕の諸事態とどういう関係に立っているかということである。これらの諸規程は，〔A〕の諸事態に対してその本質として〔B〕＝「疎外された労働」＝が出された上で，その本質〔B〕がまたどういう点にあるかという形で出されてきたものである以上，結局これら諸規定は〔A〕の諸事態と重なってしまいはしないか，そしてそれは論理の混乱を示すものではないか，ということが問題なのである。勿論我々は，単純に論理の混乱と言うわけにはいかないであろう。

マルクスは先ず疎外の直接的諸現象〔A〕を取上げた。次にそれらの一般的本質〔B〕を明るみに出した。そして次に〔B〕の具体的内容規定を行なう。ところがそれは益々〔A〕と触れ合うに至っている。ということは，直接的諸事実を

先ず取上げながら、それらを単なる個別的諸現象として叙示するに留まらず、それらの一般的本質を明るみに出し、そのことを媒介として、それらの諸事実を、その本質の特殊な現象形態として示していくという、科学的方法がここに（たとえ完全な形ではないにせよ）示されているということであろう。

ところが事態はもう一段と込み入ってくる。マルクスは〔B〕の詳しい規定を終えたところで、〔A〕を「国民経済学的事実」、〔B〕をその「概念」（「本質」ではなく）と呼びながら、次のように問題を提出する。

「今度は我々は、更に進んで、この疎外された、外化された労働の概念が、現実の中でどのように己れを表わし示さないではおかぬかを見よう。」⁽²³⁾

ここでは「概念が現実の中で己れを表わし示す」„… sich der Begriff … in der Wirklichkeit aussprechen und darstellen…“ という言い方が先ず問題となろう。兎に角、我々が今まで一応、現象〔A〕と本質〔B〕として総括してきたものが、ここで「事実」とその「概念」として纏められているのであるが、これは〔B〕が〔A〕の事実を理論的に一般化して把握したものであるということを示しているのだと言えよう。そして〔B〕もまだ、その現実の在り方、具体的社会関係としての疎外された労働の在り方、そしてその発生、発展、さらには消滅までも運動を全体的・具体的に、論理的・法則的に捉えているものではなく、従って真の「本質」を表示しているものではないということであろう。

さて「概念の現実における表われ」であるが、マルクスは「もし労働の生産物が私に疎遠であり、疎遠な力として私に立ち向かうなら、それは一体誰に属するのか？ もし私自身の活動が私に属さず、ある疎遠な、ある強制された活動であるなら、それは一体誰に属するのか？」⁽²⁴⁾と問いながら、こう答える。

〔C〕「もし労働の生産物が労働者に属さず、彼に対立するある疎遠な力であるなら、このことはただ、その生産物が労働者以外の他の人間に属するということによってのみ可能である。もし彼の労働が彼にとって苦悩であるなら、他の者にとってはそれは享樂であり、他の者の生の喜びであるに違いない。」⁽²⁴⁾

〔A〕に対して〔B〕—〔C〕の相連関する全体が本質であると言ってよいであろうか？

マルクスは〔C〕の叙述に続けて重要な指摘を行なう。「こうして私的所有は外化された労働の概念から、すなわち外化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間の概念から、分析を通じて生じる。」⁽²⁵⁾

「疎外された労働」と「私的所有」の因果関係は、以前から論議を呼んできたところであるが、マルクスはここでははっきりと、前者を原因、後者を結果とし

ている。但し単なる「概念」たる「疎外された労働」＝〔B〕を提示した段階ではなく、その「現実における表われ」＝〔C〕を「分析を通じて」出したところで初めて、これを私的所有の原因として出しているものであり、しかも別の所では、私的所有が疎外された労働の直接的結果であると言われていることを考えるなら、この段階でも両者の同一性について語ることができるかも知れない。丁度マルクス、エンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』で「分業 „Teilung der Arbeit“ と私的所有とは同じ表現である——同じことが前者では活動について言い表わされ、後者では活動の生産物について言い表わされているのである」⁽²⁷⁾と言っているのと同じように。

更に注意しなければならないことは、以上は「関係をただ労働者の側からだけ考察してきた」⁽²⁸⁾ものだということである。

「私的所有」と「疎外された労働」の関係についての以上の展開は、更に、幾つかの具体的な諸事実（結局〔A〕で挙げられていたようなそれ）を説明したり、幾つかの問題を明らかにしたりする。即ち、

〔D〕(1)「労賃」と「私的所有」の関係、その衝突の説明。⁽²⁹⁾

(2) 「社会の私的所有等々からの、奴隷状態からの解放は、労働者解放という政治的形態で現われる……」⁽³⁰⁾ということの解明。

(3) その他、国民経済学的全カテゴリーの、根本からの説明。「我々は、疎外された、外化された労働の概念から私的所有の概念を分析を通じて見出してきたように、同様にこれら両因子の助けをかりてすべての国民経済学的全カテゴリーが展開されるのであって、我々はあらゆるカテゴリーの中に、例えば駆引き商売、競争、資本、貨幣などのうちに、ただこの最初の基礎の、ある特定のそして展開された表現を再び見出だすだけであろう。」⁽³¹⁾

こうしてこの〔D〕の段階でこそ、我々が本稿65頁、26行～32行で述べたことが完全に当てはまるであろう。〔D〕は〔A〕の、それらの本質、根拠を媒介しての科学的説明であり、個別的諸事実の、本質の解明を介しての、特殊な現象形態としての説明である。

ところで、本質からの現象の展開を具体的に繰り展げる前に、マルクスは二つの課題を提起するが、これを完全に解決しないままに手稿は中断されている。

〔E〕(1) 「私的所有の一般的本質——これは疎外された労働の結果として生じたのだったが——を、真実に人間的な、そして社会的な所有に対するその関係において規定すること。」⁽³²⁾

(2) 「どのようにして人間は、彼の労働を外化し、疎外するに至るのか？ ど

る人間の非人間化の原因を疎外として把握しようとしているのだが）、現代における人間の非人間化の諸現象・諸事態を疎外と命名して満足している場合が多いのである。人間の相互孤立化、相互分裂、相互対立、そして同じ人間の孤独化、自己喪失、自己分裂、自己矛盾、或は機械文明・物質文明への人間の隷従、更には拝跪、また生活の日常性への人間の埋没、彼等の烏合の衆化、或は自覚的人間の、それにも拘わらずどうすることもできない生活の空虚感、等々。これらのあるものは社会関係であり、あるものは人間の状態であり、あるものは物質的条件であり、あるものは人間の実感であり、あるものは原因であり、あるものは結果である、等々。これらのものを現代疎外論は屢々、十把一絡げ的に、いわば融通無礙に、疎外と名づけて把握する。そこでは疎外感と疎外の状態、疎外の状態と疎外の関係、等々が十分に分析・区別されてはいない。そして実際に「疎外」という言葉にこめられているのは、屢々疎外の実感にすぎないのである。「疎外」というよりは寧ろ単に疎外感、

ところで「疎外」概念を安易に用い、人間の非人間化の諸現象、諸事態を十把一絡げ的に「疎外」として把握することと、疎外の状態・関係と疎外の実感とを十分に分析・区別せず、結局疎外を疎外感に解消するということとは、実は同義語であると言える。

人間の意識にとって最も直接的なものは一般に感覚であり、疎外について言えば疎外感である。疎外の本質、原因等々は、そのものとしては直接には与えられるものではない。疎外された社会諸関係等々もそうである。ましてやその社会諸関係そのものを産み出す物質的過程（マルクスはこれをこそ「疎外された労働」の概念で把握しようとしたのであって、それは完全に成功または完成しているとは言えないとしても、このような態度と方法自体は、科学上の一大発見であったと言ってよい）がそのものとして直接に把握されるということとはありえない。

すべてを安易に「疎外」と名づけ、実感としての疎外と物質的關係としての疎外等々を分析・区別していないということは、とりもなおさず、疎外の実感からその原因、本質等々の把握にまで進み、疎外された社会諸関係等々を分析して出してくる、ということがまだできていないということであり、従ってそうした疎外論は、疎外について如何に多くを語ろうとも、結局のところ感覚的にものを言っているにすぎないのである。たとえそこで、より深い諸関係や諸過程を表わすより高度の諸概念が使われているとしても、それらの中で動いているのはやはり、それらを使う人々の実感や印象にすぎないのである。

ところで「疎外」概念がこのようにいわば抽象化され曖昧化されるならば、そこから必ず次のことが出てくるであろう。「疎外」は結局、或は原因なしの「人間疎外」或は原因不明の「自己疎外」等々に帰着すること、こうして疎外は今や人間の宿命として受けとめられ耐え忍ばねばならぬものとなること。「疎外論」の役割は、ここではもはや疎外を疎外として人々に自覚させ受けとめさせること、その他若干のことだけに帰着するであろう。即ち疎外を単に受けとめるだけでなく、それを耐え忍ぶ心術や方途を探求・提示すること、様々の「解決法」を案出・教示すること（勿論これは疎外の根源たる社会的諸関係と諸運動そのものを変革するのではなく、疎外的事实を前提し、それに対して外側からあれこれの処方を考案し、あれこれの処置を加えるにすぎないのだが）、更には疎外の諸々の原因を「説明」しさえすること（これもまた勿論、疎外をもたらし物質的諸原因を客観的に「解明する」のではなく、疎外的事实を前提しながら、それがどうして起こるかを己れに納得させるために、外側から主観的に「説明する」にすぎないのだが）等々。例えば、人間の原罪、文明化の道を選んだ人間達の不遜さへの懲罰、生の営みそのもののもつ逆説的構造等々。

こうして「疎外論」の一つの有力な潮流ができあがる、その中に色々のヴァリエーションを含みながらも。既に1918年にジンメルは言っている。「…生の諸過程から生まれたこれらの産物は次のような特色を有する。即ち、その成立の瞬間に既に、独自の確固たる存続をもち、この存続は、生そのものの休むことのないリズム、生の成長と滅亡、生の不断の更新、生の休むことのない分裂と再統一にはもはや無関係である、という特色を。……これらの産物は、これらを創造した靈的力動から切断された、それから独立した状態にあり、その中で固有の論理と法則性、固有の意味と抵抗性を示すのである。この創造作用の瞬間には、これらの産物はおそらく生に対応するが、しかし生が更に進展するにつれて、これらは生に対して頑なな疎遠状態に、いや対立状態に入りこんでいるのを常とする。⁽³³⁾」近くはエルウィン・メツケも言っている。「人間が依って自然の上位に立ち、自然の支配者になるところの労働は、同時に逆説的な仕方で、彼を新たな依存状態のうちにつれこむ。この依存状態は、何かある自然因果性にすぎないものに帰するのでなく、自分自身の生産と自分自身の生産物への人間の依存状態なのである。」⁽³⁴⁾宿命としての「疎外」。神の救済によるそこからの脱出。或は古代世界（人間の人格性と社会的共同性がそこにおいて統一していたと言われるギリシャ・ローマ世界）への憧憬。ロマン主義的「疎外論」（但し19世紀のそれのように、中世世界に憧れるのではないところの）。

しかしながら、我々がここで考えてみなければならないのは寧ろ次のことである。もしあれこれの疎外論がこのような宿命論に陥っているとすれば、それは疎外論の偶然的欠陥なのか、必然的欠陥なのかということ。時代認識、時代批判を「人間疎外」というカテゴリーを基軸にして遂行しようとするところの、いわば纏まった一つの思想および理論としての「疎外論」、哲学或は社会学等の一ジャンルとさえ言えそうな「疎外論」（今我々はこのようなものとしての疎外論の問題性を考察しているのであった）は、それ自身の本性に基いて、このような宿命論へと傾斜することはないのかということ。

人間疎外がその中で生じ、その中で止揚されるところの歴史の全体、社会の運動の全体（所謂「疎外」はその中の否定的な一局面にすぎない）を、全体として積極的に把握する哲学と社会科学の総体、この総体の中に疎外概念がしかるべく位置づけられ生かされるというのなら話は別である。そうではなくて、疎外論が、疎外論として、纏まった一つの思想、理論となるならば（哲学、社会学、文明批評等々の独自の一ジャンルとなったり、哲学の全体、社会学の全体等々に対して基本思想となり原理論となり、こうして「疎外論」としての哲学、社会学等々が構成されたりするならば）、疎外論はまさにそのことによって、宿命論の方向へと傾斜するのではないか？ そのような疎外論は、人間史の否定的局面たる疎外の事実を、批判するためにせよ、慨歎するためにせよ、主内容として取上げ、叙述し、解説し、批評する。このようなアプローチのために、必然的に、その否定面を己れの一局面として生み出す積極的「根拠」そのもの、要するに、うちにネガティブなものを生みだしながら、かつそれを止揚していくところのポジティブな全体（これこそ人間史の全体である）を、全体として捉え叙述することが後景に退く。後でそれら否定面の発生の諸条件や克服の諸条件をどのように解明したり説明したりしてみても、それはついに“とってつけた”説明の域を出ず、従ってそれは非常にネガティブな性格を免れず、十全の説得力を有しない。疎外論が、疎外の事実を取上げ批評することを主内容とするところの独自の思想、独特の理論に留まる限り、こうならざるをえない。こうならないためには、疎外の事実を取上げながらも、それを歴史の積極的全体の把握の中に位置づけるほかはない。⁽⁸⁷⁾それは即ち、疎外論が「疎外論」として独自の、独特な思想、理論に留まるのではなく、人間史の積極的全体を捉える積極的科学の中に、しかるべき場を見出だし、己れを、独自の思想、理論としては止揚することにほかならない。⁽⁸⁸⁾

このように見てくるなら、現在流行の「疎外論」——それは概ね非または反マ

ルクス主義者によって展開されてきた——に対して、マルクス主義者達が概ね批判的乃至は否定的であるのは蓋し当然であろう。しかしながら、マルクス主義者達の疎外論批判にも問題なしとしない。だが紙数の関係もあるので、このことの考察は次の機会に譲りたい。

(1968・5・30)

註

- (1) 邦訳『近代人の疎外』栗田賢三訳、岩波新書。
- (2) 大井正氏は近著『唯物史観の成立過程』（未来社）で言っている、「今日の疎外論の原型は、端的にいうとマルクス『経済学・哲学手稿』において形成されたといつてよい。今日、疎外論を論ずるもののうち、マルクス主義の立場にたつものは、いうまでもなく、マルクスの諸文献を、とくに『手稿』を根拠にしながら「疎外」問題を取り扱っている。さらに大衆社会論者のばあいでも、「疎外」現象にかんしては、マルクスに準拠し、あるいはマルクスを借用してその議論を展開している。また、実存主義的「疎外」を問題にするばあいにも、ここにおける他山の石のうちでもっとも大きい石はマルクスである。」（第二篇、第一章「現代疎外論の原点」214頁）。
- (3) K. Marx, *Zur Kritik der Nationalökonomie, Ökonomisch-philosophische Manuskripte*. In: K. Marx/F. Engels, *Kleine Ökonomische Schriften*, Dietz Verlag, Berlin 1955, S.97—98. 邦訳、国民文庫版『経済学・哲学手稿』藤野渉訳、97頁。この一文の脈絡は必ずしも簡単でなく、色々の解釈がある。エミル・ボッティジェリは次のように仏訳している。

Nous avons donc maintenant à comprendre l'enchaînement essentiel qui lie le propriété privée, la soif de richesses, la séparation du travail, du capital et de la propriété, celle de l'échange et de la concurrence, de la valeur et de la dépréciation de l'homme, du monopole et de la concurrence, etc., bref le lien de toute cette *aliénation* avec le système de l'argent. [Manuscripts de 1844 (*Économie politique & Philosophie*), présentation, traduction et notes de Emile Bottigelli, Editions Sociales, Paris 1962, p.56]

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| (4) Ebd., S.98. 同上, 98頁。 | (5) Ebd. 同上。 |
| (6) Ebd., 同上, 98～99頁。 | (7) Ebd., S.99 同上, 99頁。 |
| (8) Ebd., S.99. 同上, 100頁。 | (9) Ebd., S.100. 同上, 100頁。 |
| (10) Ebd., S.100. 同上, 100～101頁。 | (11) Ebd., S.101. 同上, 102頁。 |
| (12) Ebd., S.101. 同上, 102頁。 | (13) Ebd., S.103～104. 同上, 105頁。 |

- (14) Ebd., S.106. 同上, 108頁。 (15) Ebd., S.101. 同上, 102頁。
- (16) Ebd., S.103~104. 同上, 105頁。原文はこうである。
 „Indem die entfremdete Arbeit dem Menschen 1. die Natur entfremdet,
 2. sich selbst, seine eigne tätige Funktion, seine Lebenstätigkeit, so
 entfremdet sie dem Menschen die Gattung ;...“
- (17) Ebd., S.106. 同上, 108頁。 (18) Ebd., S.101. 同上, 102頁。
- (19) Ebd., S.101~102. Full Stop 同上, 102~103頁。
- (20) Ebd., S.103~104. 同上, 105~106頁。
- (21) Ebd., S.106. 同上, 108頁。 (22) Ebd., S.106. 同上, 110頁。
- (23) Ebd., S.106. 同上, 110~111頁。
- (24) Ebd., S.107. 同上, 111頁。マルクスはここで, (b₄) を想起するよう注意している。
- (25) Ebd., S.108. 同上, 114頁。
- (26) „...die entfremdete Arbeit ist die unmittelbare Ursache des Privateigentums.“ (Ebd., S.110. 同上, 115頁)
- (27) K. Marx/F. Engels, *Die Deutsche Ideologie*. In: K. Marx/F. Engels, *Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd.3., 1958, S.32. カール・マルクス, フリートリッヒ・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳, 岩波文庫, 43頁。
- なおマルクスは、私的所有が本源的には疎外された労働の結果であって原因でないことをたとえて「丁度神々もまた本源的には人間の知性の迷いの原因ではなくて結果であるのと同じである」(*Kleine Ökonomische Schriften*, S. 109. 『手稿』114頁)と言っている。このフォイエルバッハの発見になる命題は偉大な科学的発見であるし、こう言うとすべてがすっきり解決したように見えるのであるが、しかし我々は問わねばならないのである——“ではその知性の迷いは如何なる条件の下で生じるのか?” と。疎外された労働についても同じである。そしてマルクス自身、このすぐ後でそういう問いを出している(Ebd., S.110. 同上, 116頁。〔E〕の(2)を見よ)。とすると「疎外された労働」はもはや絶対的原因ではなく、それ自体が社会的生産とその諸関係の一定の発展の中で生じるものであることになる。そして疎外を生みだすような生産とその諸関係の一定の発展とは、また私的所有を生みだすようなそれでもあり、ここでも、疎外と私的所有の同一性(但し前者は活動、後者はその生産物を指示する)というように側面の違いはある)が言えそうである。ただ、この側面の違いは重要であって、同一性の中で、疎外がより根源的な側面であることを掴まなければ、私的所有は物神化してしまうであろうが。このことについては別の機会により詳しく研究したい。

- (28) *Kleine Ökonomische Schriften*, S.108. 『手稿』113頁。
- (29) Ebd., S.109~110. 同上, 114~115頁。
- (30) Ebd., S.110. 同上, 115~116頁。 (31) Ebd., S.110. 同上, 116頁。
- (32) Ebd., S.110. 同上, 116頁。 (33) Ebd. 同上。
- (34) 尤も、事物の過程と思考の過程と叙述の過程とは、それぞれ直接に同一視されるわけにはいかないものであり、この『手稿』では屢々思考過程が生の形で叙述に表われているので、(a)は(b₁)の「表現」であるとか、(b₄)は(b₂)等々の「帰結」であるとか言われるのは、必ずしも実際の関係を直接に表現しているのではなく、思考と叙述の運びの関係でそのように表現されているという可能性もある。しかし大体においては、今述べてきたようになるであろう。
- (35) Georg Simmel, *Der Konflikt der modernen Kultur*, Ein Vortrag, 2. Aufl., München und Leipzig, Verlag von Duncker & Humboldt, 1921, S. 3. 阿閉吉男訳「近代文化の葛藤」『ドイツの社会思想』河出書房, 334~335頁。
- (36) Erwin Metzke, *Mensch und Geschichte im ursprünglichen Ansatz des Marx'schen Denkens*. In : *Marxismusstudien*, 2. Folge, Tübingen 1957, S. 7.
- (37) Pappenheim の “*The Alienation of Modern Man*” が、その叙述が優れており、行き届いた配慮の下に書かれているにも拘らず、そしてマルクスに非常に同情的であり、疎外の根源を社会構造にあるとするところまでいっているにも拘らず、いま一つ説得力に欠け、読者に何となくペシミスティックな印象を与えるのは、やはり今述べたような理由によるのではなからうか？
- (38) 我々はこの模範を K. Marx. *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf)*, 1857—1859 (邦訳『経済学批判要綱』全五冊, 高木幸二郎監訳, 大月書店刊)に見ることができる。特に「貨幣に関する章」の S. 64~65, S. 75~82, S.111, S.133~137, 「資本に関する章」の S.159, S.387~388, その他参照。(ページは Dietz Verlag, Berlin 1953 による)。少々長い引用を敢えてしておこう。「美しくまた偉大なものは、まさにこの自然発生的繋がり、即ち諸個人の知識と意向に依るのではないところの、そしてまさしく彼等が相互に独立でお互いに無関心であることを前提するところの繋がり、まさにこの物質的及び精神的資料交換シュトゥッフヴェックセルの中に基いている、と言われてきたし、また言われてもよい。そしてこうした物的な繋がりの方が、彼等の間になんの繋がりもない状態とか、なにかおそろしく真底狭い自然と支配—隷属〔の諸関係〕とに基いた局地的でしかない繋がりよりも、ましとされることは確かである。同様に諸個人

が彼等自身の社会的な諸々の繋がりを創り出してしまいう以前にそれらの繋がりを彼等が自分達の下に従えるわけにはいかない、ということもまた確かである。しかし、あの専ら物的な繋がりをば、自然発生的な、個性・個人の自然・本性インディヴィドゥアリテット・ナトゥーアから（反省された知識や意向とは反対に）切り離されない、それに内在的な繋がりと考えるのは、愚かしいことである。この物的な繋がりは彼等の生産したものである。それは一つの歴史的な産物である。それは彼等の発展のある特定の段階に属するものである。それがまだ彼等に対して疎遠な自立したものとして存在しているということは、ほかでもなく、彼等がまだ彼等の社会的生活の諸条件を創造中であって、彼等の社会的生活をこれらの諸条件からして始めたわけではない、ということを実証しているだけである。それは、一定の、限局された生産諸関係の内部での諸個人の繋がりであり、そういう自然発生的な繋がりのなのである。普遍的に発展した諸個人にあっては、彼等の社会的諸関係は、彼等自身の共同的諸関連として、事実また彼等自身の共同的統御の下におかれているのだが、こういう諸個人は、何ら自然の産物ではなくて歴史の産物なのである。こうした個性・個人が可能になるほどの諸資力の発展の程度と普遍性は、まさに諸交換価値を土台にして行なわれる生産をこそ前提とするのであり、この生産こそ、個人の普遍性を生み出すとともに、個人の自分自身および他の者達からの疎外を生み出し、だがまた個人の諸関連および諸能力の普遍性と全面性をも、初めて生み出すのである。発展のより以前の段階においての方が、個々の個人がより十全なものにみえるのは、彼がまだ、まさにこの自分の十全な諸関連を苦勞して作り出し作り上げ、それを自分とは独立の社会的諸力および諸関係として自分に対置している、ということまではいっていないからである。そんな原始的な個人の十全さをしきりに懐しがるのは滑稽なことであるが、あの、個人がすっかり空虚にされている段階にいつまでも留まらねばならないと信じるのも滑稽である。後者のブルジョア的見解は前者のロマン的見解の対のもの以上に出たためしはなく、それゆえ前者も、正当な対のものとして、天国の果てまでも後者のお供をするであろう」(S.79~80)。なお、これによって見れば、マルクスの疎外論、物化論が、例えばルカーチのそれ（特に „Geschichte und Klassenbewußtsein“, 1923 に展開されているそれ）と甚だ異質のものであることがわかる。ルカーチの見解は、寧ろジンメルのそれに近い。たとえそれが商品生産社会、資本制社会についてのマルクスの見解を基にしていると自称されているにしても。

- 39) 歴史の否定面だけを見るのではなく、肯定面を全体的に見る中で、そこに位置づけて否定面を見よ、との主張は、マルクスの疎外概念自体が否定面と同時に肯定面を備えたものであることを明らかにするという形で、藤野渉氏によって展開されている。ところがこの主張は、今までのところ正当に理解されたこと

は殆んどないように見える。例えば, „Entgegenständlichung“ が「対象性剝奪」と訳される所以も, ここでの「対象性」そのものがあるものの, 主体にとって単に外的な, 無思想な, 非主体的なあり方を意味していることを洞察しなくては, 全く理解されえない。「対象性剝奪」とは, まさにこのような対象の単に対象的な, 外的な, 非主体的なあり方を止揚し, 対象を主体化することなのであり, しかもそれが即ち実は主体の対象化にほかならないのである。主体の力の発現, その対象への定着としての対象化は, 同時にまた外的存在としての対象を主体化することであるという弁証法。大井正氏は前掲書で, 藤野説を取上げ, 検討し, そして反対していないようなのであるが, しかし以上のことをとんと理解できないでいるように見える。ところで, 疎外概念自体が肯定面をもつかどうかということは, 別の機会に詳しく考察したいと思うが, 疎外が人間の自己実現, しかも 自己の内容の豊富化の積極的過程と絶対に切り離されえず, その一局面として生じるものとマルクスにおいて考えられていることは確かである。主体が, 静止した狭い自己同一の状態に留まるのでなく, その状態を否定し, その否定を再び否定することによってより豊かな内容をもったものとして己れを取り戻すという過程(個人としての労働する主体を中心に見れば, 主体→対象化→対象の獲得, 人類史的に見れば, 狭い人格的結合体→物化された普遍的に発展した社会関係の形成, 世界史の成立→その関係を己れの下に従える自由な, 普遍的に発展した個人の実現, 共産主義の成立), これこそ人間の自己実現の過程であり, だからこそ人間は歴史的により豊かな存在になっていくのであるが, 疎外は, この, より豊かになる契機としての否定性と結びついてのみ生じるのである。それが, それ自体肯定的なものでもあるのか, それとも, 真に肯定的なものへの段階としての否定性の中のまさに 否定面を指しているのかは, より詳しい考察に値いするとしても。

(後記)

以上の展開は, 私の主題にとってまだ完全なものではない。以下の諸点を次の機会に敷衍したいと思う。

1. マルクス主義者の「疎外論」批判の問題点。

(a) 疎外を宿命論的に見る立場に対して, その原因は私的所有, 階級分裂と階級支配, 搾取等にあるとする論法の問題——この場合, 現代社会の非人間化の諸事態を疎外として受けとめる点ではマルクス主義と非マルクス主義の間に観点の相違はないのか, なくてよいのか等々という問題。

(b) 初期マルクスの疎外概念を「分業」, 「私的所有」等々への「止揚」という方向で見る見地の問題——この場合, 疎外という概念を単純に止揚しきること

ができるのかという問題。私は一面では「止揚」ということを認めるものであるが、しかしそれにも拘らず、疎外概念と疎外の思想は、マルクス主義の世界観において軸点の一つであるし、今もあらねばならぬと考えている。

2. ではどういう点でかということになるが、この点での答えが、今の主題の結論となる。それに答える前に次のことを考察する。

(a) 城塚登氏は「『草稿』の基本的視座が個人に置かれていたのに対し『ドイツ・イデオロギー』では、社会（歴史的社會）に置かれているという変化を見てとることができる」（「自己疎外の論理と唯物史観」、『唯物史観』第5巻）と言っているが、私はこの指摘に同意する。しかしマルクスの視座は『手稿』以前ではやはり社会、歴史的社會であった（『ヘーゲル国法論批判』1843年などを見よ）ことを忘れてはならない（『手稿』でも、社会の中の個人、社会諸関係の結節点としての個人であることに変わりはない）。とすると『手稿』は、マルクス主義という革命的に新しい世界観の彫琢のための何か特別な手続だったように見える。それは、ヘーゲルの哲学体系に対して『現象学』が特異な関係にあるのに比することができるかも知れない。いわば、人間の在り方の最も原基的な、エレメンタルな形態の分析、そこに『手稿』の特異性がある。このことに気づくなら、私の主題にとっての答えが明らかになってくる。

(b) 古在由重氏は言っている。「…科学というものは…進歩すればするほど、いわば遠心的になっていく。…しかしながら…遠心的になればなるほど求心的にならなければならない」「人間を中心とする現実全体の問題、細切れな現実ではなくて、人間をも含む全現実、これこそが思想の課題であり、哲学の中心問題である」（『哲学と現実』『思想』1966年、第4号）。この指摘が答えへのヒントを与える。

社会形態そのものをそのものとして見、その運動をそのものとして把えることはあくまでも必要である。しかし、それを、人間の自己実現の形態として批判的に見る目は、片時も忘れてはならない。この目こそ哲学の目である。社会の動きが益々複雑に展開し、人間の知識と意向から独立に発展していくとき、それを知識においても実践においても我がものとするためには、必ずこの哲学の目が必要になってくる。新たに社会の動きを把えていくときには、この哲学的批判の目は不可避の通路、煉獄になるし（『手稿』）、複雑な社会の運動が全く社会科学的に把えられたときには、この批判の目はその基礎において生きていなければならない（『資本論』）。疎外概念は、こうした目で現実を見るときに必要なものであろう。こうした目がなければ、科学は死物となる。疎外概念を欠いては、社会科学（とりわけ資本制生産についての）は死んだ知の体系、教条等々になる。疎外論は、そういう意味で単純に止揚されえないのである。また、そういうものであるから、疎外論は、労働の疎外、社会関係の疎外等々といったよう

に、いくつかのレベルで姿を変えて現われうるものであり、それぞれのところで哲学的批判の目が生きているのである。そういう意味で、疎外論は、世界観としてのマルクス主義にとって、一つの基軸的位置を占めるのである。